

'91 TAKAOKA CRAFTS EXHIBITION

TAKAOKA 1991.11.1FRI-11.4MON TOKYO 1991.11.27WED-11.29FRI



語りかけるモノたち 生活文化へのメッセージ



工芸都市高岡'91クラフトコンペ審査委員長
建築家・(株)黒川雅之建築設計事務所代表取締役社長

黒川 雅之

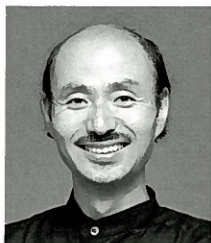
出品点数2088点、出品者数454人と、第6回目を迎えた高岡クラフトコンペは、毎年出品者数・点数共ふえ、一点一点に込められた作者達の熱い創造の意欲で、審査会場は熱気あふれるものとなった。

出品者も全国四十三都道府県に及ぶ広がりを見せ、名実共に、全国規模の催しとして定着した。

このクラフトコンペが、これほどまでに注目をあびるものとなった理由は、クラフト・アート、デザイン等の領域が曖昧になりつつある現代文化の状況をとらえたこのコンペの性格にあり、夫々の領域に閉じこもることなく、領域間を開放することで、閉息状態にある各領域に新時代を開こうと広い領域にまたがる審査員を迎え、地場から、世界から、そしてアートから、デザインからも、その作品の向うところを見定めようとする審査会の姿勢が従来からのクラフトの概念を越えた作品を集め、生み出すことにつながったと思われる。

グランプリとなった作品は、デザイナーと職人との共作で、クラフトの素材と技法が、円錐形の直截なデザイン的形態でまとめられた作品。金賞の作品は、漆器の艶やかな表面を艶やかなスーパードグにまとめ、しかも蓋も身も同一化して2ヶの器ともなるデザイン的発想を持ったもの。銀賞は、激しい討論の結果、一つにしまり難く、二点となったが、機械工業的精巧さを持った木製品と、屈折抜きに人々を感動させるおらかな存在感のあるガラス器が選ばれた。

日本全国の様々な地域からの、いわば文化の交差点となったこの高岡クラフトコンペと、その展示会は、この作品集とも言うべき図録と共に、そのまま文化情報のメディアとして、文化の、富山からの発信であり、日本、ひいては世界への大いなる刺激となってゆくであろう。



デザイナー
㈱イガランスタジオ代表取締役

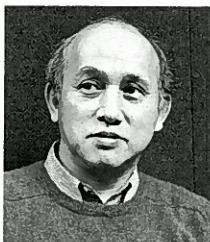
五十嵐 威暢

デザインクラフトの世界の中に、これからのデザインの面白さがたくさん詰まっているように思う。

日本各地の素材や技が受け継がれ、生き延びたということは、それら自体が地球や人々にやさしい、且つゆるやかなスピードによるものであった証でもある。

新しいライフスタイルに相応しいデザインクラフトの芽の数々とこのクラフトコンペの審査会場で出会うことが出来た。入賞作品は当然それらの頂点に立つ力作揃いである。

次回コンペの参加者をお願いしたことは単にモノをデザインするだけでなく、新しいモノを中心に広がる新しい生活のイメージも同時に見えるような提案をということだ。



造形家
㈱モブ代表取締役社長

伊藤 隆道

今年もたのしい時を過ごさせてもらった。もちろん、その裏側にひそむ応募者、主催者の莫大なエネルギーを感じながらである。審査員の顔ぶれもたのしい要因のひとつである。そのほとんどは直接クラフトと関係のないジャンルの人達ばかりで、それぞれ異なった立場や論理をもっている人達である。しかし、審査ではそれほど意見の食い違いや選択の差はみられない。これはジャンルを超えたものに対する姿勢が共通しているからである。つまり、作り手側でも使い手側でもなく、すでにある既成の概念にこだわらない市のひろい見方のできる人達だからであろう。これもこのコンペのすばらしい特徴のひとつになっていようである。ただその人達に選ばれた作品がクラフトと呼ばれるのが正しいかどうか、もうすこし別の新しい言葉を探さなければいけない時期がすぐ来そうである。入賞作品にはその新しい言葉のキーワードが含んでいる。



プロダクトデザイナー
カワカミデザインルーム代表

川上 元美

あとを継ぐ若手が居なくなって…と、手仕事の衰退のきびしい現実をあちこちの現場で目のあたりにする昨今である。

このクラフトコンペで見る作家達の新しい息吹きとでも言えようか、伝承の技術、確かな手にする表現力を伴った作品の数と、その中に豊かな個性と工夫された技の結晶を発見したとき、この上ない安堵感を覚える。とともに安定的、ややもすれば繰り返しの線上から脱した積極的な試みのあるダイナミズムの感じられる作品が見られると、生活に潤いを与えてくれるべきクラフトの領域がもっと広がってくるのでは。

審査会場の脇で次の準備のため待機するはつらつとした高岡の工芸にかかわる多数の若者の姿に、このコンペの行く先を見たような気がした。



アートディレクター
㈱日本ベリエールアートセンター代表取締役社長

河北 秀也

近年、伝統工芸と現代のテクノロジーを融合させる実験的な試みが日本全国の工芸家達によって行われている。そのひとつの成果が高岡'91クラフトコンペにはっきりと出てきていると思う。

もともと、クラフトは人間と技術とが美的共有関係を持ちながら成立して来たものであり、高度に発達した現代のテクノロジーを美の世界に注入することは工芸家にとって何らためらう必要のない要素である。

ややもすると伝統工芸という一時代前の技術や美的基準によってこれらは評価されがちだが、そこには工芸そのものがその時代時代の技術や思想によって革新されて行ったという視点を忘れてはならない。

このコンペテーションでは、すでに実験という段階を越え、現代の工芸として成立する多くの作品を見ることができた。



ソニー企業㈱代表取締役社長

黒木 靖夫

第6回を迎えた高岡クラフトコンペは、いよいよ質量ともに充実してきた。とくに北は北海道から南は九州・沖縄にいたるまで、未出品の県はほとんどないほどの認知度の高さは、地味な広報活動にもかかわらず、このコンペのあり方が多くのクリエイターに支持されていることを示している。工芸はもとも鑑賞するための美術品ではない。それは実用的であり生活的であり、工芸の美としてあくまで用に即した美しさの追求であった。鑑賞の対象としての工芸品が存在することは否定しないが、技術の精緻さだけの伝統工芸は高岡では否定したい。

伝統工芸は守り続けるだけでは衰退する。発達する技術を添加することは重要だがそれより現代の文化として、どうリニューアルするかが問題なのである。

高岡のクラフトコンペは、今後とも新しい視点に立ったユニークな存在として発展していくであろうことを信じている。



デザイナー

㈱平野デザイン設計代表取締役会長

平野 拓夫

高岡クラフトコンペもいよいよ6回目を迎えることとなった。「文化の時代」「豊かな時代」と言われている昨今、クラフトに対する人々の思いはますます高まってきている。

30年来、日本の経済は産業の育成・発展を念じてここまで成長してきたが、その結果はものの便利性やスピードを基軸としたハイテクと効率主義の展開であった。人間の文化は「真」「善」「美」の調和でもある。この中で我々は「真」に片寄った生き方をしてきたとも言える。そして、これは人間の基本的な生活から潤いやゆとりを奪いはじめた。今このことに気づき人間本来の価値や文化を如何に取り戻すかということが重要になってきた。クラフトはその意味において身近な生活の中への文化の取り入れ口、また自分を表現する媒体として重要な役割を果たすものである。高岡クラフトコンペはクラフト本来の価値がわかるいろいろな造形(建築・グラフィック・工業デザイン・映像・家具等の広い分野)の専門家で審査員が構成され、伝統をも踏まえ、新しい生活を視点とした審査を行っている。これが高岡クラフトコンペの特徴であり、年を追ってその人気が急上昇している要因なのであろう。



金工家
東京芸術大学美術学部教授
平松 保城

審査員として作品を評価する場合、私は、①自分はどういうことを言いたい。こんなことはどうか、という問題提起がユニークで明確であること。②表現する素材が生きていること。そして、アイデアが空転せず、素材・技術を通して定着していること。③つくるものが単なるモノの内だけの展開にこだわらず、モノと周囲、モノと空間との関係をふまえていること。を重視している。

その点、グランプリを受賞した相川繁隆君の蒼茫(そうぼう)は、製作意図が明確にして、単純な形態の中に永年の体験から生まれたと思われる表面処理も適確で素材が素直に生かされている。静かなる緊張感のたどる品格ある作品である。

また、金賞・銀賞をはじめ奨励賞の作品も、それぞれにみごたえのある作品であった。

日本クラ:



グラフィックデザイナー
株式会社松永デザイン事務所代表取締役社長

松永 真

審査会場に所収しと並べられた作品群、全国各地からの応募の著しい増加は、報告を聞かされるまでもなく、一目瞭然、眼を見張るものがあつた。対峙する審査側も負けずに多彩。企業家、建築家、造形作家、工芸作家、インダストリアルデザイナー、グラフィックデザイナー。とにかく、この多彩と多彩の対決が「実に面白い。まさに“生活はデザインなり”を実証するにふさわしい、珍しく熱のこもったコンペティションであると改めて思う。この交錯と主催者側の熱意が今後、どこまで発展していくか、大いに楽しみである。

入選作品も、今年からは念願叶ってオールカラーで図録に収録されることになった。それをどう感じ、どう評価するかは、それぞれの見方があると思う。つまり、作品群のありのままをより近似値に見ていただくことにその意義があると思っている。受賞作に対する我々審査員の評価は寸評の通りである。

我々の平和で健全な営みが続かず、時代や環境とのヒビツな対話には終わりが無い。デザインは特別なものではない。生活者である限り全ての人が審査員なのである。そういう意味で、ぐっと自分の足元に引き寄せた知恵比べ、技比べも、まだまだお楽しみはこれからだと思ふ。審査後の当地の美酒も、こちよい疲労の中で格別のものとなった。

CRAFT COMPETITION IN TAKAOKA

工芸都市高岡'91クラフト展

グランプリ

「蒼茫(そうぼう)」

緊張感があり、完成度の高い金属の器となっている。工芸的なフォルムにおちいるのを避け、円錐形という基本形に造形行為を留めて美しいディテールとフォルムに品良くまとめ上げた作者の力量は確かだ。とくく暗い風合いに仕上がりかちな銅器の概念を払拭するよに、トルコ石のような爽やかな色彩を持った表面処理は、金属群の中にあって際立っており、この作者の形状と質感のハーモニーへのこだわりが垣間見える。

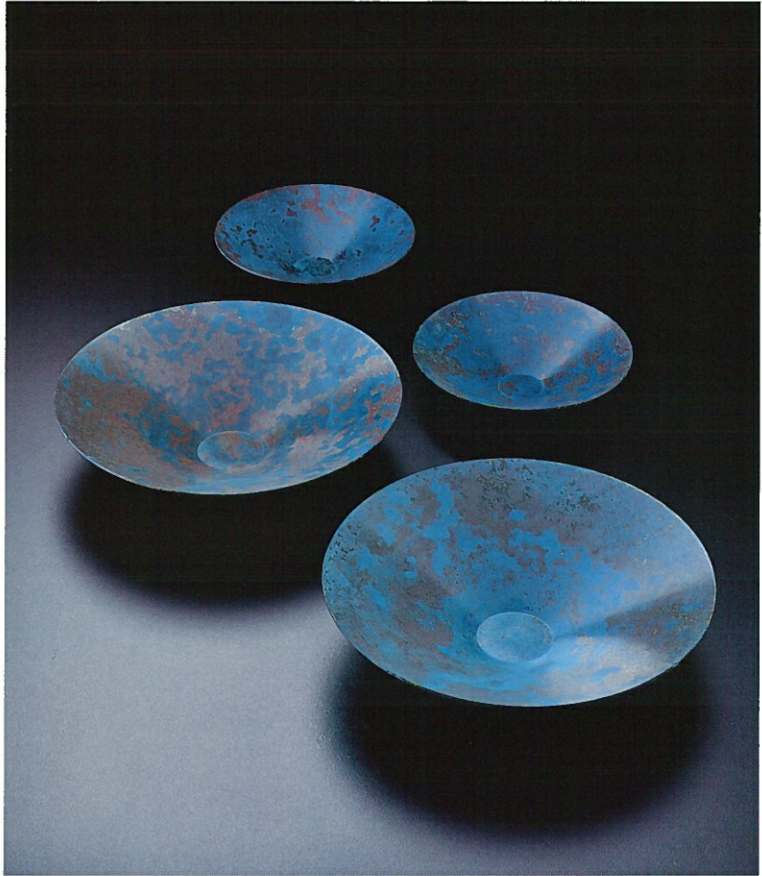


出品者

相川 繁隆
AIKAWA SHIGETAKA

1952年 石川県松任市生まれ
1976年 金沢美術工芸大学 工芸デザイン科
銅金卒業
柴竹中製作所デザイン室入社
1978年 第1回エンバ賞美術展佳作賞
1983年 '83とやまの作家展招待 高岡市立
美術館賞
1987年 第2回デッサン大賞展
第26回京都デザインコンペ銅賞
1989年 高岡クラフトコンペ金賞
1990年 柴竹中製作所デザイン室長
伊丹クラフト展銅賞
日本クラフトデザイン協会会員

独自の試みが
多くの成果が
もたらして
いる。



●材質 真鍮 ●寸法 30×30×7.5cm 20×20×5cm

金賞

「朱塗合子」

古い伝統の漆器に超楕円という純粋な幾何学的形体を取り入れた素直さが結果として成功した作品である。ここに一部をカットした全く同一形態の蓋と身を持つことにより、用途の多様性を付加するなど、クラフトと言ふよりも、デザイン的手法の勝った容器となっている。作者なりの視点で工芸の求める用の美の世界へ、漆器の新しいリニューアルを目指した意義を認めたい。



出品者

黒田 昌吾
KURODA SHOGO

1963年 富山県高岡市生まれ
1986年 富山大学卒業（佛丸産に入社）
1987年 高岡クラフトコンペ入選
1988年 高岡クラフトコンペ入選
1989年 高岡クラフトコンペ入選
'89ジャパンデザインコンペ石川入選
富山県デザイン展入賞
1990年 高岡クラフトコンペ、高岡市展（工芸）に入選
富山県デザイン展特別大賞（県知事賞）



GOLD PRIZE

15

●材質 木・漆 ●寸法 36×24×16cm

銀賞

「CIRCUS I・II」

上位の受賞作品とは全く違うポジションにあり、気負いを感じさせず、観る者の心を和ませる作品となっている。ガラスの冷たいイメージはなく、むしろ暖かさを感じるのは、表面のカットパターンが、立体的イラストレーションのような自由で楽しい雰囲気を充ちているからであろう。加工技術の進歩に助けられている部分もあるが、これだけのスケールの仕事を気楽に楽しんでいる伸びやさが良い。



出品者

三枝 しずよ
SAEGUSA SHIZUYO

- 1961年 東京生まれ
- 1987年 武蔵野美術大学 工芸工業デザイン
学科卒業
- 榎木村硝子店入社
- 高岡クラフトコンペ入選
- 1988年 日本クラフト展入選
高岡クラフトコンペ入選
- 1989年 日本クラフト展入選
高岡クラフトコンペ奨励賞
- 1990年 日本クラフト展入選
東京デイリーコンペ入選(西武)
- 1991年 デザインフォーラム入選(松屋)



●材質 ガラス ●寸法 $\phi 29 \times 18$ cm

銀賞

「HASHI CASE II」

木のクラフトの持つ甘い技術のイメージを一掃する緻密で精巧な仕事が新鮮だ。敢えて木にこだわり、種類を選び、厳密な計算と工夫を重ねて、機械加工を駆使しつつ、工業製品に劣らない精巧な細工をこなす作者の力量は、驚きですらある。手仕事と機械加工が完璧なまでの調和を保っており、この作者の木に寄せる愛着の深さと機械加工への精通、ふりがうかがえる。

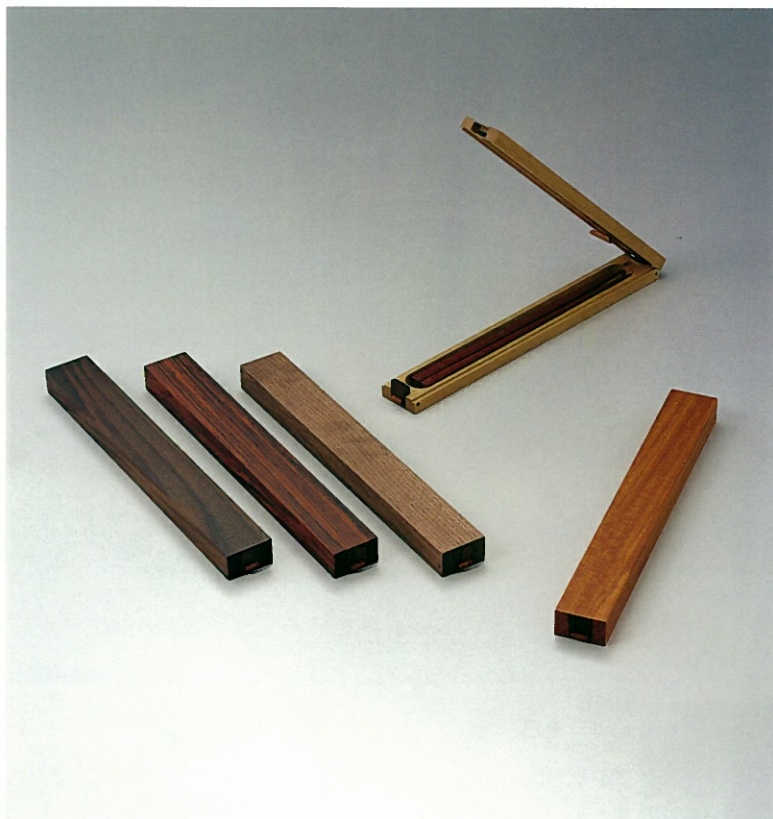


出品者

丹野 則雄

TANNO NORIO

- 1951年 旭川生まれ
- 1976年 北海道造形デザイン専門学校卒業
家具メーカー勤務
- 1980年 家具メーカー退社
クラフト&デザイン タンノ 設立
- 1981年 遊びの木箱展奨励賞
- 1983年 朝日現代クラフト展入選
木の椅子は語る展出品
- 1984年 朝日現代クラフト展入選
- 1987年 アトリエヌーホーコンペ準グランプリ賞
北海道クラフトグランプリ優秀賞
- 1989年 札幌芸術の森クラフト展入選
個展を開催
- 1981～91年 JCDAクラフト展入選



●材質 木 ●寸法 3×24×2cm



出品者
石井 克己
ISHII KATSUMI

1953年 仙台生まれ
1982年 東京芸術大学大学院 彫金専攻修了
1984・85年 朝日現代クラフト展入選
1989年 金沢工芸大賞コンペティション 優秀賞
世界子ザイン博(名古屋)出品
1990年 朝日現代クラフト展入選
1991年 朝日現代クラフト展入選
日本橋高島屋URジュワリー展出品
初日本クラフトデザイン協会会員
高岡短期大学金工実習科講師

奨励賞

「ペーパーウェイト」

●材質 鉄・銀 ●寸法 4.4×4.4×4.4cm φ6×2.5cm
9.5×3.3×1.6cm φ5×5cm



出品者

(株)織田幸銅器
ODAKO-DOUKI Co.,Ltd.

- 1981年 高岡伝統産業総合展 総合展大賞
以後入賞5回
- 第22回全日本中小企業総合見本市優秀賞
- 1984年 富山県伝統的工芸品展入賞 以後入賞3回
- 1986年 高岡クラフトコンペ奨励賞
- 富山県デザイン展デザイン賞
- 1987年 高岡クラフトコンペ奨励賞
- 1988年 富山県デザイン展奨励賞

奨励賞

「花器」

- 材質 ブロンズ ●寸法 25.5×6×29.3cm
8.6×8.6×39.5cm



出品者
吉村 由美
YOSHIMURA YUMI

1959年 富山県小矢部市生まれ
1988年 国立高岡短期大学 産機工学学科
デザイン専攻卒業
藤竹中製作所デザイン室入社
高岡クラフトコンペ入選
1989年 高岡クラフトコンペ入選
1990年 高岡クラフトコンペ入選

奨励賞

「ごろごろ…」

●材質 アルミ ●寸法 50×30×10cm 35×25×6cm



出品者

吉田 幸央
YOSHIDA YUKIO

1960年 生まれる
1985年 朝日陶芸展奨励賞
1989年 丸壺グループ展
銀座松屋グループ展
1990年 ギャラリー花(新宿)時料展
1991年 ギャラリー花(新宿)個展

奨励賞

「Rのシリーズ」

●材質 磁器土 ●寸法 44×44×13cm 14×14×6.5cm



出品者

西村 充

NISHIMURA MITSURU

1964年 大阪生まれ
1988年 大阪芸術大学陶芸専攻科 修了
1989年 朝日現代クラフト展 金沢彫刻展
1990年 朝日現代クラフト展
1991年 京都市工業試験場陶磁器本科 修了
芦屋市展 朝日現代クラフト展
第31回全国西美術展 スモールセラミック展
静岡クラフト展 金沢工芸大賞コンペティション
1988～91年 個展も開催

奨励賞

「Container」

●材質 陶器 ●寸法 61×29×5.5cm



出品者

平井 真人

HIRAI MASATO

1950年 兵庫県生まれ
 1974年 京都精華短期大学 芸術科染織コース専攻科修了
 1975年 染織集団“X”結成に参加(以降'90年解散まで活動)
 以降1989年まで('87を除き)毎年出品(京都市美術館)
 1982年 第24回日本工芸会公募展(大阪) 内閣総理大臣賞
 1988年 第23回西部工芸展(福岡) 日本工芸会西部支部長賞
 1990年 総合集団“AUF”結成に参加
 第1回“AUF”展(京都市美術館)
 1991年 '91金沢工芸大賞コンペティション出品
 1976・77・83・88~91年 個展を開催 他グループ展多数

奨励賞

「雲の侵食」

●材質 インド綿 ●寸法 250×190cm



出品者

杉江 善次
SUGIE ZENJI

1950年 愛知県常滑市生まれ
1984年 中日国際陶芸展入選
1989年 伊丹クラフト展入選
1990年 高岡クラフトコンペ入選
東京タイラーアートコンペ入選
伊丹クラフト展入選 朝日現代クラフト展入選
明日への茶道美術公募展
勸励賞千宗室宗元賞奨励賞
1991年 伊丹クラフト展入選 朝日現代クラフト展入選
金沢工芸大賞コンペティション入選
朝日陶芸展入選6回、東海匠工芸展入選8回
名古屋・京都・静岡等で個展を開催

奨励賞

「鉢・五態」

●材質 陶器 ●寸法 23×23×10cm

'91 TAKAOKA CRAFTS EXHIBITION

TAKAOKA 1991.11.1FRI-11.4MON TOKYO 1991.11.27WED-11.29FRI



語りかけるモノたち 生活文化へのメッセージ